

藤原良経の「詠草」について

はじめに

藤原良経の「詠草」なるものが、『香雪斎蔵品展覧図録』（昭和一二年四月、藤田男爵家第三回入札目録）に掲載されている（第1図）。著名な入札であり、その際の目録という事で周知のことかもしれないが、簡単に紹介し、良経の作歌法の一部を窺い、「詠草」の信憑性のほどについて考えてみたい。

良経の筆になるもので、詩懐紙や消息、あるいは写経など漢字で書かれたものの真筆は幾つか残っている。しかし、仮名で書かれたものは、佐竹本三十六歌仙絵の歌や豆色紙（「見ぬ世の友」に所載）など伝称は多いものの、真跡と確認しうるものは報告されていないようである。このような現状で、この「詠草」なるものが真筆と認められれば貴重といえようが、はたしてどうであろうか。

一

『香雪斎蔵品展覧図録』の十番目に掲載されている当「詠草」は、「良経詠草冬歌」とあり、「一風 紫地印金・中 白地金欄」・「上下 北絹」と表具の説明に続き、「竪九寸 巾一尺四寸」とある。約二七・三センチ×約四二・四センチの寸法は、本紙のものと思われるが、自筆と考えられる（消息と比較して、まず問題はあるまい）良経の詩懐紙や熊野懐紙・明月記の料紙の大きさよりは幾分小さいようである。あるいは、四辺が少し落ち落してあるのであろうか。紙の質はまったくわからない。虫喰いが三ヶ所程あるようである。

本文は、

大岡賢典

冬

良経

をくへしなつゆのよすかに
あきくれてたのみしには、
かれの也けり

と読める。当歌は、秋篠月清集・南海漁父百首中「冬十首」の第一首目、
月やどすつゆのよすがに秋くれてたのみしにははかれのなりけり

（『新編国歌大観』所収）
秋篠月清集・五四〇

に該当する歌であろう。今日、初句は定家本・教家本の両月清集、三十六番相撲立詩歌・後京極殿御自歌合など、すべて「月やどす」で伝わっている。^(四)「をくへしな」は初案なのであろうか。

「をくべしな」の句は、勅撰集をはじめ、『新編国歌大観』の第八卷までの索引には見出せない。「をく」のは「つゆ」なのか、あるいは他の何か（頼みや思ひなど）なのか、判然としない。なによりも歌語として熟していないのではないか。このことが他に見出せない因であろう。それ故に、「つゆ」に月がやどるといふごく自然な発想にしたがって、「月やどす」と改めたのであろう。そうすることによって、一首は具象性を増し、上三句の歌意は明瞭になる。上三句の秋の本意を強く意識させる言葉の撃がりと、第五句の一転して初冬を明

示する言葉によって、初冬の侘しさを表出する。そして、「つゆのよすが」「あきくれて」「たのみし」と、恋を暗示する語をつづけ、さらに「今ぞしるくるしき物と人またむさとをばかれずとふべかりける」(古今・卷十八・雑下・九六九 業平)や「野とならばうづらとなきて年はへむかりにだにやは君はこざらむ」(古今・卷十八・九七二 読人不知)の伊勢物語(四八段、一二三段)の世界を踏まえ、恋の気分をただよわせることになる。

当歌が良経の自信作であったであろうことは、三十六番相撲立詩歌や自歌合に自撰していることによつて知られる。初句の改作が、このような秀歌をもたらしただといえるのだが、いまひとつ注意しなければならないことがある。「つゆのよすが」という斬新な句があることである。この句が「月やどす」と改めさせたであろうことは想像に難くないが、これは良経の創出ではない。自歌合の判詞で俊成が、「露のよすがに秋暮れてと待るいみじくありがたく侍る」と評した「つゆのよすが」は、寂蓮が花月百首(建久元年)で詠んでいた。新古今集(卷五・秋下・四八八)に、

撰政太政大臣、大将に侍りける時、月歌五十首よませ侍りけるに

寂蓮法師

ひとめみし野辺のけしきはうらがれて露のよすがにやどる月かな

とある。自家で披講された時、良経はこの句が印象に残ったのであろう。「つゆ」が「よすが」と結合した、その新鮮さにひかれて採り、「をくべしな……」と詠じたのであろう。その時、自歌が寂蓮歌と余りに近似することを嫌い、連想としては自然な「月やどす」の句を避けたのであろう。だが、「をくへしな」が余りに熟さぬため、最終的には「やどる月」との類似を覚悟で改作したと考えられる。寂蓮歌にある恋の気分(五)を受けついでおり、良経が寂蓮歌に学んだことは否定しえない。

このように、良経の作歌法を推察させる一例ではあるが、良経はこの句が心に残ったらしく、千五百番歌合のための百首(院第一度百首)中「秋廿首」の第一首目に、

ふかくさのつゆのよすがをちぎりにてさとをばかれず秋はきにけり

(八三五)

と詠むことになる^(六)。また、この句はやはり千五百番歌合で、通具と丹後が、

かげやどす露のよすがのあきくれば月ぞすみけるをのしのはら
(七百番右勝・一三九九 通具)

わりなしやつゆのよすがをたづねきてものおもふ袖にやどる月かけ

(千二百十七番右勝・二四三三 丹後)

と詠んでいる。さらに、定家も建永元年に、

思ひおく露のよすがの忍草君をぞたのむ身はきえぬとも

(拾遺愚草・二七〇七、続古今・卷十九・雑下・一七九〇)

と詠むことになる(家隆・後鳥羽院・俊成卿女にもこの句の詠がある)。

当「詠草」は、南海漁父百首という建久九年までには詠まれていたと考えられている、百首歌中の一首だけのものであるが、秀歌となる以前のその姿を伝えている。また、一首に心を尽し、魅惑的な歌語を積極的にとりこむ同時代人達の姿をも想わせるのである。

二

当「詠草」の図版を見て、すぐに気づくことがある。良経の詩懐紙(第2図)や消息(第3・4図)と比較すると、相違は明らかである。それは表面的なことなのだが、まずは「詠草」の字の線が消息などに比して細いということである。掲載の許可を得ていないので、図版はそれらの一部のみをあげておくが、消息や詩懐紙の線と「詠草」の線とを比較してみると、次のことがいえる。

両者の差異は、漢字と仮名との違いによるには大きすぎる。消息などの線は、太く、ゆるやかに、気宇大きく動いている。「詠草」の線は、細く、気ぜわしく、右上がりの型にはまった動きをしている。そして、消息などの線と空白とが構成する面が濃密で、緊張感のあるものであるのに対し、「詠草」の面には弱々しさや空虚さしかない。もっと注視すれば、消息などが「字形は方形またはやや縦長にして整齐であり、点画は勁健にして筆力が充実している」(『古筆大辞典』「後京極様」の項)といわれるのに比して、「詠草」は「(良経の書はすなおに書いているが、)良経の書を模倣した書は型に嵌って、独特の癖がある」(同前)といわれることに該当しはしないか。

当「詠草」は、良経との伝称をもつもののなかでは、佐竹本三十六歌仙絵の歌を書いた筆跡に近い。図版(第9図)を見れば、同一とはしえないが、極めて近似しているとはいえよう。この佐竹本の書風を、春名好重氏は「後京極様であるが、良経の真跡とは認められない」とし、「字形はよく整っていて、縦長であり、線は硬直にして潤いが無い。細い線が多い」と評している(『古筆大辞典』「佐竹本三十六歌仙絵」の項)。当「詠草」と佐竹本との字形をさらに細かく見れば、「詠草」の垂直の線が左から右へと、S字形にうねるのが極端であるのに気づこう。字形からだけいえば、このように筆意を表に出してしまふのは、そうしないものよりは時期的に下ると考えるのが一般的であろう。筆意を顕わにする書風が起ころのは、簡単にいえば、藤原定信(一〇八八—一一五六ごろ)の頃からであり、藤原忠通や藤原俊成らがその書風を受けつぎ、展開させた。このような時代背景の中に、また良経の書も「詠草」もある。だが、「詠草」は字形からだけでも佐竹本より下るのではあるまいか。

良経の書いた仮名数文字が、道家の装束のことを父兼実に聞いた消息(第4図)の中にある。小さな図版では見えにくいかもしれないが、「萩にてもや可候らん」と「やかて上直廬へハ」の二ヶ所である(第5図)。これらは、太く、潤いのある線で、作為なく書かれている。「て」は方形で円やか、「や」の起筆は平均的な右上がり、終筆もごく自然に縦に伸びている。「詠草」に見られるような、極端な右上がりやS字形に伸びる癖は見られない。

「良経」の署名を比較してみる。「詠草」は右上がりに書かれ、線は細く鋭い。詩懐紙のそれ(第6図)は均衡がとれ、軟らかい。消息の署名(第7図)は「経」に虫損があるため十全ではないが、癖のないすなおな字である。字形は、「詠草」の「良」が縦長で、「経」がやや横長であるのに比して、詩懐紙や消息のものは方形で安定感がある。

こうして幾つかの点について見てみると、この「詠草」が良経によって書かれたものだという可能性は、ほぼなくなってしまう。良経筆だとする、書的な明証はなにひとつえられないのである。書風の展開のなかで、「詠草」は鎌倉時代初期の共通性を一応は有しているとはいえる(第8図^(八))。しかし、良経の筆跡だという個別性は認められないのである。

おわりに

良経自筆だとすることのできない当「詠草」。佐竹本三十六歌仙絵の歌(第9図)を書いた某に近い力量を持った、何某によって書かれた当代のものなのか^(九)。あるいは、良経の推敲などと関りのない、後世の、全くの悪意の所産なのか。

それにしても、贋作には贋作のもっともらしさが必要ではあるまいか。作者表記を「良経」とだけするよりは、それらしい位置のあった方が目的を達しやすいであろう。書く歌も、もっと著名な歌の方がよいであろう。ましてや、初句だけを改悪する必然性はあるまい。「詠草」ということを狙って初句を改めたのなら、改作後の初句をそれらしく加筆しておけばよい。

あるいは、良経が「露のよすが」を中核にしての一首の完成度を、より高めようとして、誰かに添削を乞うたものの、これを受け取った側の写しなのか。書風が俊成(第10図)のものに近いことは、その経緯を暗示する^(一〇)。さらには、その写しの孫写しなのか。歌本文最後の「り」の終筆に、線の切れが見られる(第11図)のは、虫喰などの存在を伝えようとしたとも考えられよう。資料として伝えようとする善意の所産が、真筆とされてしまうこともある。

このような真贋のはっきりしない資料を用いてのノートに、期待すべきものはないのかもしれない。だが、この「詠草」を贋作だと認めなければならぬ根拠が見出せない限り、ノートの端にかようなことを書きつけることは許されようか。

(一) 藤田家は、これ以前に昭和四年五月と同九年四月と二回の入札売立を行い、好評を博していた。この第三回も、四月九日から一日までの大阪美術倶楽部での下見に先だって、四月四日、五日の両日、東京美術倶楽部で前下見を行った。大名物有楽井戸茶碗(現在は東京国立博物館蔵)をはじめ、小島切や天平時代絵因果経など二六〇点が出品された。カラー版を多数含む豪華な図録は、天金で厚さ五センチに及ぶ。

(二) 詩懐紙は、「春日同賦宮花不限年」の七言律詩が一九八九年の三井文庫名品展に出品され、同展の目録に掲載されている(当懐紙の写しが「予楽院臨書手鑑」(陽明

叢書国書篇第一五輯『大手鑑・予楽院臨書手鑑』に所載。消息は、父兼実に見えた、俊成九十賀の際の和歌端書様のこと（建仁三年一月二日、京都国立博物館蔵。当消息に関して、『和歌史研究会会報』第九七号（平成二年五月）に佐藤恒雄の「建仁三年十一月二十二日良経消息について」がある）と道家の元服に際しての装束等の故実についてのこと（日付なし、東京国立博物館蔵）との二通、それに年次不明の消息案一〇通が重要文化財二二『書跡・典籍・古文書V』（昭和五二年 毎日新聞社）に掲載されている。また、『古筆大辞典』（春名好重編著 昭和五四年 淡交社）には先の二消息の他に二通の消息（内一通は存疑）が紹介されている。写経は、建仁三年正月一六日の亡母の五七日忌に書写した般若理趣経（仁和寺蔵）が日本の美術一五六『写経』（昭和五四年 至文堂）や『仁和寺名宝図録』（昭和四八年）などに掲載。

(三) 詩懐紙の寸法は縦三一・六センチ、横五〇・六センチ（『三井文庫名品展』平成元年）。『古筆大辞典』の「熊野懐紙」の項に、「最も大きいのは正治二年（一一〇〇）十二月三日に切目王子で催された和歌会の「遠山落葉・海辺晚望」の源通親の懐紙で、縦三四・三センチ、横六一センチであり、その次に大きいのは後鳥羽院の懐紙で、縦三四・二センチ、横六〇・三センチである。料紙の四辺は少しちたおとされているから、もとの大きさはわからない。身分の低い右衛門少尉源季景の懐紙は縦三〇・一センチ、横四九・九センチで、後鳥羽院や内大臣兼右大臣兼右大将の通親の懐紙に比べると少し小さいが、元来少し小さかったのか、たちおとされて小さくなったのか、よくわからない」とある。また、『明月記』の項には、「縦三〇センチばかり、正治二年（一一〇〇）秋の料紙は三一・二センチであり、嘉祿元年（一二二五）夏の料紙は二九・七センチである」とある。

(四) 片山享『本秋篠月清集とその研究』（昭和五一年 笠間書院）中の「本文和歌校異一覽」参照。また、青木賢豪『藤原良経全歌集とその研究』（昭和五一年 笠間書院）にも、異同の指摘はない。

(五) 寂蓮歌に対し、窪田空穂は「さみしい艶」といい（『新古今和歌集評釈』）、久保田淳は「恋歌めいた雰囲気」といつている（『新古今和歌集全評釈』）。

(六) 当歌は後に新古今集（巻四・秋上・二九三）に入集する。「をくへしな……」に、深草の語を加えてさらに物語的にしている。伊勢物語の世界を背景とし、恋の気分を余情としていることは「をくへしな……」と同様である。このようにして完成度を高める作歌法は、良経の詠歌法の典型であり、成功した例である。

(七) 通具歌は、彼の自讃歌の一首となる。丹後歌中の「つゆのよすが」の句に対し、判者顕昭は源氏物語に「あさからぬよすがにかけて」・万葉集に「よすがの山と」（三八八四）・孫姫式に「よすがなみなり」の類語があることを指摘し、「つゆのよすがなど歌めきて侍れ」と勝にする。だが、この句が寂蓮歌や良経歌に既に使用されていたことを、顕昭は知らなかったようである。

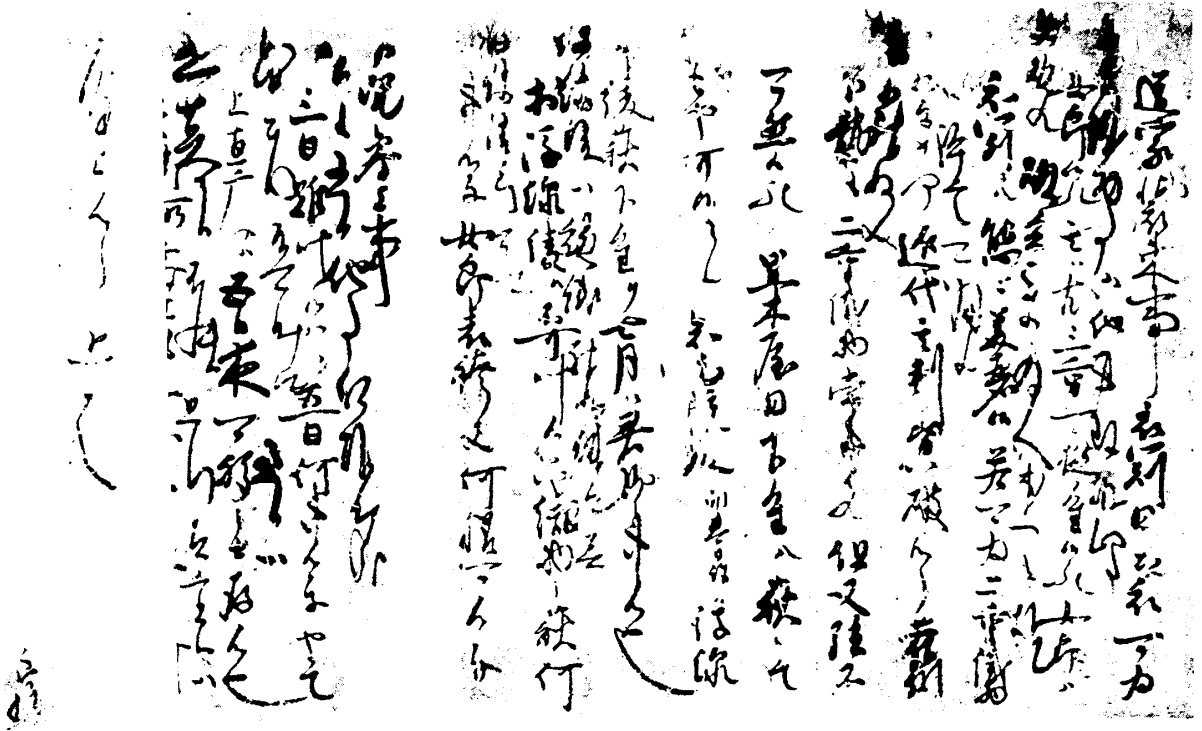
(八) 当「詠草」が同時代の他の筆跡と共通の特徴をもっていることは充分了解できる。また、当「詠草」が良経の筆跡とされることも、豆色紙（第8図）の筆跡との類似か

ら、首肯される。

(九) 書写年代の判定に、紙質を知ることができれば参考になるであろうが、全く知りえない。書跡を写真で見ると、筆勢や字形など、豆色紙と同様、当「詠草」は佐竹本の歌（第9図）に近似していることは述べたとおりである。したがって、佐竹本の書を良経だとする判断基準にしたがって、当「詠草」を良経のものだとすることに、古筆の筆者を比定する上からは正当性がある。

(一〇) 当「詠草」が、俊成筆の日野切（第10図）や昭和切などに近似していることは、一見して気づく。細く、鋭い線、垂直の線がS字形に伸びることなど、共通点が多い。だが、「の」に見られるように、字形に違いがある。それに、料紙に切り込んでゆくような筆力の強さが、当「詠草」にはない。

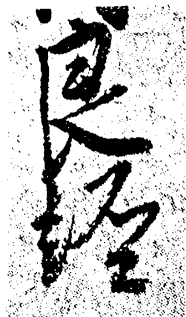
(一一) 俊成を「我道之師匠也」（自歌合跋文）とする良経が、添削を乞うに俊成が最適であることはいうまでもない。俊成の手元に残っていた「詠草」（俊成は「詠草」に直接添削せず、別紙を用いたとすれば、加筆のない「詠草」が残る）を、後人が更に写したか。あるいは、そう思わせるように、意図したか。



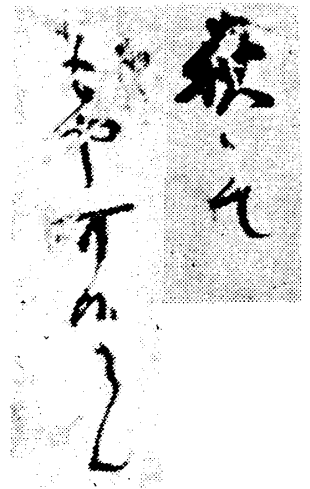
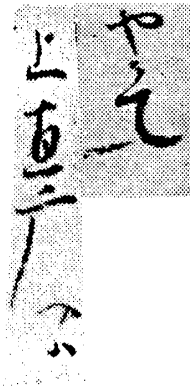
第4図 消息 (道家装束之事部分)



第7図 消息署名 (第4図部分)



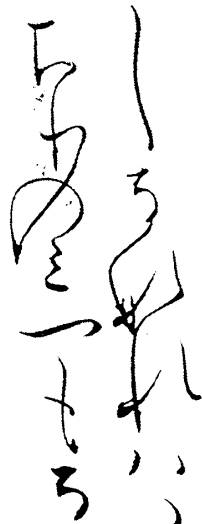
第6図 詩懐紙署名



第5図 仮名 (第4図部分)



第11図 「り」の切れ (「詠草」部分)



第10図 日野切部分



第9図 佐竹本部分



第8図 豆色紙部分